

リレーエッセー
大きくなあれ
Vol.19

**受け継がれていく
「ありがとう」**

帰依龍照



またお盆の季節がやって来る。忘れもしない、平成八年の夏のこと。中学の先輩から、寺に一本の電話が入った。

「龍照、ちひろが今亡くなった。」

野球部のキャプテンとして、私たち下級生にいつも優しく接してくれた先輩の涙声に、「慎二にいい、ちひろちゃんはよく頑張りましたね」と私も泣いた。先輩と奥さんとは、中学からお付き合いさせていた。あのころの私たちがしてみれば、二人は憧れのカップルであり、一人娘のちひろちゃんが病氣療養中だったこともよく知っていた。ちひろちゃんも、当時小学三年生。とてもかわいい小さな女の子だった。

お通夜にお参りすると、それまで気丈だった奥さんが私の顔を見るなり「龍照、ちひろの供養をお願いね」と号泣された。先輩夫婦の悲しみを察し、その日は朝方まで当家に残ることにした。

『仮の世の 仇とはかなき身を
知れど 教えて先立つ 子は菩薩
なり』—この世には、どんなに

頑張っても乗り越えることのできない悲しみや苦しみがある。しかし、それを何かの縁として受け入れる時、人は幸せになれると親に教えて先立つ我が子は、我が子ながら尊い菩薩である—少し落ち着いたのか、ちひろちゃんとの思い出を聞かせてくれた。

ある日、ちひろちゃんが通う小学校で防災訓練が行われた。警報のベルが鳴り、クラス全員が急いで校庭に集合した。「ちひろちゃんがいらない！」と気付いたのは、しばらくしてのこと。みんなで探している時、校庭の裏庭から「大丈夫！」と大きな健司君の声がした。健司君はちひろちゃんを背負っていた。病気がちでみんなのようには早く歩けないちひろちゃんを、クラスで一番乱暴者で「ジャイアン」と呼ばれている健司君が、優しく、おんぶしてくれたのである。

健司君は何も言わずにちひろちゃんを降ろすと、クラスの列に戻った。

「龍照、少しくらい勉強が苦手でもけんかばかりしてもいいから、困っている友達を思いやれる優しい心を持つことが大切さ〜ね」と先輩。「ちひろが、将来は健司君のお嫁さんになるって言って聞かなくて」と、奥さん。この言葉が今でも心に残る。

葬儀告別式の日、健司君が代表してお別れの手紙を読んだ。

「ちひろちゃんをおんぶして、階段を降りている時、とつてもちっちゃいんだなと思いました。ずつと黙ったまんまだったけど、校庭に着いて降ろしてあげた時、ありがとう」と言ってくれました。

僕は、ちひろちゃんに当たり前のことをしてあげただけなのに……でもとても気持ち良かったです。

さよならだけど、これからはありがとうと言われるような良い子になります。ちひろちゃん、ありがとう。

すばらしいあいさつであった。受け継がれていく「ありがとう」。今年のお盆は、ちひろちゃんの七回忌である。

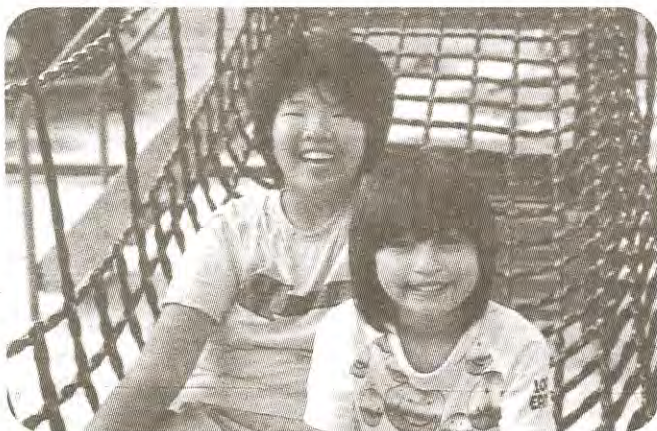
このコーナーは、日々こどもたちとかかわる方のエッセーです。

〔執筆者〕
○帰依龍照(住職)
宮城英雅(小児科医)
平良辰浩(学童クラブ指導員)
下地直也(保育士)
真栄城栄子(すぬち平和文化館)
新里恒彦(ケルン苑主管)

ご意見をはがきかファクス、Eメールで編集部までお寄せください。

遊び場スケッチ

上原高台公園(西原町)



志帆ちゃんとお友達の綾子さん(右)

オンヤペリは
仲里志帆さん(坂田小学校五年生)

今年の夏、8月には石垣に旅行へ行く。初めて石垣島の海で泳ぐんだ。海で体をプカプカ浮かべているととっても気持ちがいいはず。

もう夏休みの宿題も全部終わったし、毎日綾子とばかり遊んでるんだよ。四年生まで忘れんぼうの志帆だったけど、五年生からは忘れ物が一個だけになった。たぶん先生のおかげだよ。忘れ物帳とがんばりノートに書くようになったからだよ。

将来は看護婦さんが幼稚園の先生になりたい。小さな子が「志帆ねーちゃん」ってなついてくれるときとってもうれしい。自分の周りのみんなにやさしくできなきゃ、自分がどんなに好きな人ができても、好きになってもらえない、両思いにはなれない……と志帆は思うんだけど。でしょ?



仲里志帆

